

現代日本語における男女差の現れと日本語教育

——意識・実態調査の分析——

安田芳子・小川早百合・品川なぎさ

話し言葉の男女差、意識調査、実態調査、呼称、待遇表現

1. はじめに

日本語教育では、フォーマルな話し方、すなわちデス・マス体から教え始めるのが一般的であるが、やがて丁寧な表現と親近感のある表現との使い分けができるようになることが、よりよい対人関係のための大切なソーシャル・スキルである。そのためには、インフォーマルな会話を体系的に教える必要があるが、まず先に男女による言葉遣いの違いを分析しておく必要がある。小川(1997)は、その一環として日本語の男女差の実態を主に終助詞からみて考察した。男女差はなくなってきつつあるとはいうものの、やはり消滅したわけではなく、女性らしさ、男性らしさは何らかの形で意識されている。またそのような違いも、場面によって意識される度合いが異なるようである。

本稿では、現代の話し言葉の男女差についての意識調査と実態調査を行った結果を示し、特に男女差がよく現れると指摘の多かった人称代名詞を含む呼称¹⁾を取り上げ、意識の裏付けの確認、意識と実態とのずれを指摘する。また、男女差を日本語の指導方法にどう生かすかについても触れる。

2. 従来の意識

実際の調査の前に、日本語の話し言葉の男女差について、従来の研究ではどのように捉えられてきたかを概観しておきたい。これについて扱っている文献の多くは、いわゆる「女の言葉」を取り上げる際の一環で、男女差について述べている。そうしたいくつかの文献で述べられている特徴を確認しておく。

日本語の女性の言葉の歴史的変遷については、杉本(1975,1994)などに詳しい。そこでは、女性の言葉を社会的人為的条件、即ち女性を劣るものとして男性が人為的につくりあげた言葉と、人間的自然的条件、即ち真に女らしい精神ののっとなって創造された言葉の2種類があるとする。(杉本:1975,p.30) また、現代では言語的特徴として、女性のみがもつ独特な語彙と表現、「お～」のつく語彙、自分を示す代名詞、文末の間投助詞、言いさしに微妙な男女差があるとしている。また言語以外の特徴としては、男女の横関係より、縦関係という枠組みの中で女

性の言葉を用いることが古代から重要だったとしている。(同,p.146)

寿岳 (1979) では、女性の言葉は、尻上がりのイントネーション、小さな声
が特徴で、男女の言葉の対比としては、「おなかー腹」「おいしいーうまい」など
の語彙、「あたしーおれ」などの人称、「わーな」などの終助詞があるが、日常使
われるやや乱暴な言葉の世界では、男女の言葉に際立った対立がないのが実態で
あろうとしている。また、女らしさを表すには敬語が強く志向されるとある。

井出 (1983) によれば女性には丁寧に話すことが求められ、それにはフォー
マリティの高い言葉を使う。その要素となるものの例として、です/ます体、敬
語、接頭辞「お」、「わたし・あなた」、ソフトな文末表現にする終助詞「わ・の
よ・の」をあげている。他に決まり文句、言い訳を言う、理由を付け加える、直
接表現の回避、声の高さや調子、イントネーションも丁寧さを作り出す要素とし
ている。男性だけにみられるものには、フォーマリティのレベルが普通以下とさ
れる野卓な表現があり、相手を指す「きさま・てめえ」、感嘆詞「畜生、ちえっ」、
語尾「～やがる」、文尾の「ぜ・ぞ」、縮約形「すげー」などを例示している。

堀井 (1990) は、女性の言葉の特徴として、終助詞、「御」をつける言葉、人
称代名詞、体言止めや「ウッソーオッ」など長音化・促音化による情動的表現を
あげ、男女の相違として、話し方が男性は力強く支配的で率直、女性は柔らかで
協調的で婉曲としている。

表1 日本語の男女差を特徴づける終助詞

文献	国研 1951	上野 1972	田中 1973	杉本 1975	新明解 第三版 1981	井出 1983	Makino & Tsutsui 1986	堀井 1990	荻岡 田窪 1992	広野亮 第四版 1995	新明解 第五版 1997
終助詞											
男性が使用すると記述された終助詞	ぜ										
	ぞ										
	な										
	よだ・た・な・ Vinf・ない+										
	い										
	さ										
	かい										
	か										
	のか										
	のお										
	や										
	ろ										
	もんか										
だ											
だい											
女性が使用すると記述された終助詞	わ										
	の										
	こと										
	わよ										
	かしら										
	よ										
	なさい・N+										
	のよ										
	てよ										
	て										
たら											
わね											
もの(もん)											
ね											

注) 記述文献数の多い順に終助詞を配列

これら例示された言語の男女差の特徴は、①終助詞、②呼称、③音変化、④イントネーション、⑤語彙、⑥文法（体言止め、言いさし）、⑦敬語（「お」を含む）、⑧パラ言語、⑨その他（discourse、表現方法など）に分類できる。中でも、①終助詞については、上記の文献以外にも、数多くの研究があるので、辞書なども含めて、従来どう捉えられてきたかを表1にまとめて示す。

言語以外の特徴として挙げられていたのは、1つは表現や話し方の「印象」についてで、女性の表現は感情がこめられている、やさしい、婉曲など、男性は野卑な表現、支配的で率直などとするものである。もう1つは、対人場面など、場面に依存して言葉の男女差が生じるという指摘である²。

以上を日本語の男女差に関する従來說として、次節以下で参照していく。

3. 日本語の男女差についての意識調査

本節では、アンケートによる意識調査の結果を示し、分析する。

3. 1. 調査の方法

調査は1996-8年に首都圏と近畿圏在住の大学生435名（女性287名、男性148名）を対象に行った。以下の3点の質問項目に記述式で答えてもらった。

- a. 日本語の話し言葉には男女の違いがあると思いますか。
- b. 日本語の話し言葉に男女の違いがあるとすると、どういう場面・表現・言葉遣いなどにあらわれていると思いますか。
- c. あなた自身は、自分の性別らしい言葉遣い（例：女らしい言葉遣い、男っぽい言葉遣い）をしていると思いますか。

3. 2. 調査結果の分析

3. 2. 1. 男女差の有無

男女差はあると答えた人がないと答えた人より多く、全体で、ある57.2%、ない32.9%、その他9.9%であった。1974-5年の国立国語研究所の調査⁹（以下「国研調査」とする）では、全体で、ある62.3%、ない35.4%となっており、若年層（15-24歳）だけ取り出すと、ある62.4%、ない35.5%、その他2.1%となり、この2調査間にはほとんど変化がないといえる。

本調査の結果は以下の3点にまとめられる。

- ① 関西の言葉には共通語に比べて男女差が少ないという意識がみられる。
（記載例） ・関西弁に男女差はない。
・大阪弁にはほとんど差がない。
- ② かつて差はあったが現代では少なくなっているという意識がみられる。
（記載例） ・だんだん違いが少なくなっている。
・男女区別されない話し方が多くなっている。

その根拠として以下のようなことが挙げられている。

- (記載例)
- ・若い世代ほど中性化している。
 - ・男女の言葉がミックスされているように感じる。
 - ・女性が男性の言葉に近付いている。
 - ・「だよ」は女性が使っても違和感がない。
 - ・男でも「かしら」と言ってしまうことがある。

24年前の国研調査でも同様の結果が現れている。(1981a, p.131)

- ③ ないと答えた人(143名)の中にも、男女差の例を挙げている人が59名と半数近くいた。これは、男女差の存在は知識としてはあるが、実際の会話場面では意識していないためだと考えられる。

3. 2. 2. 女性らしさ男性らしさの印象

言葉の男女差を印象として捉えた記載は全体の約20%(90名)あり、具体的には表2の通りである。(複数回答)

表2 女性らしさ・男性らしさの印象

女性らしさの印象 (63例)	柔らかい(26)、優しい(12)、丁寧(11)、あたたかい、力強さに欠ける、抑え気味、物静か、親しみを与える、主観的、のんびり、綺麗、丸い感じ、品がある
男性らしさの印象 (61例)	乱雑(11)、荒っぽい(10)、力強い(4)、素っ気ない、威圧的、粗野、ぶっきらぼう、事務的、客観的、はきはきしている、するどい、冷たい、野蛮、きつい

これらは従来に見られる女性の言葉・男性の言葉の特徴と一致する。男女差はないと答えた人の中にも上記のような印象を挙げていることから、女性は優しい感じ、男性は荒い感じというのが固定概念として植え付けられていると考えられる。

3. 2. 3. 男女差の言語的特徴

男女差を印象としてではなく、言語上の特徴として具体例で挙げたものが269名(61.8%)あった。それを2節で示した9つの分類に従って考察する。

- ① 終助詞を含む文末表現 これを挙げたのは142名(32.6%)で、言語上の特徴としては最も多い。複数回答であるが、数の多い順に並べてみる(表3)と、

表3 女性らしさ・男性らしさが現れる文末表現

女性らしさ (220例)	ね(44)、よ(27)、でしょ(21)、だね、なの、よね、の、だよ、ねえ、かしら、なのよ、ね、かな、だもん、だよ(3)、のよ
男性らしさ (159例)	だろ(30)、よ(15)、な(14)、だぜ、ぜ、だよ(9)、だ、か、だよな、ぞ、だぞ、や、かよ、よな、さ

従來說とほぼ同じ結果であるが、逆に以下のような意見もいくつかあった。

- ・男性の「だぜ」、女性の「よ」「だわ」は使われなくなっている。
- ・典型的な女性の言葉「わ」は使われていない。
- ・テレビでよく「だわ」を耳にするが、実際にはほとんど言っていない。

- ② 呼称 呼称に関しては 93 名(21.4%)が具体例を挙げている。複数回答を多いものから順に並べてみると、女性らしさはほとんどが 1 人称と 3 人称を挙げたものであるのに対し、男性らしさは 1 人称と 2 人称が多かった。(表 4)

表 4 女性らしさ・男性らしさが現れる呼称

女性らしさ (87 例)	私(42)、あたし(7)、名前・ニックネーム(6)、あの人の人(6)、あなた(4) 等
男性らしさ (136 例)	おれ(45)、ぼく(32)、おまえ(29)、そいつこいつあいつ(13) 等

「あなた」は呼称の 223 例すべてのうちのわずか 4 例であった。従来「あなた」は女性の表現と言われているが、これは少なくとも若い女性の意識にはないようだ。

- ③ 音変化 音変化については 14 名(3.2%)しか挙げていないが、男女とも大半が ai が e になる男性の文末表現を挙げた。男性の表現として「～してえ/ねえ/ねえよ/ねえぞ/ねえよな」(9 例)の他、「わりい、～スよ、～つつても」(各 1 例)などがある。女性の表現としてはほとんどなく、「しちゃった」(4 例)、が主である。
- ④ イントネーション イントネーションに関しても 26 名(6.0%)が挙げただけである。そのほとんどは女性の表現として「だよー、かなー、だー、だしきー、だつてー、やだー、じゃない、だよー」など語尾が上がる、語尾がのびるという特徴を挙げたものである。
- ⑤ 語彙 語彙を挙げたのは 54 名(12.4%)、総数 123 例である。「食う」「メシ」「うまい」などを男性の語彙として挙げたものが多いが、「食べるー食う」(10 例)、「ご飯ーメシ」(8 例)、「おいしいーうまい」(5 例)、「お腹すいたー腹減った」(2 例)などと男女の言葉を対比した記述が特徴的である。その他に、女性の表現としては悲鳴、「だつてー」や「超～」などのやり言葉があった。男性の表現としては「あほ、ぼけ、ちくしょう、くそ、ぶっ壊す、まじ」などの感嘆詞があった。これらはみな従來說と一致するところである。
- ⑥ 文法 文法に関するものを挙げた人は少なく、7 名(1.6%)、6 例であった。しかし、主語の省略、助詞の脱落、文節が短い、接続詞を使わないなどは男女どちらにも見られる傾向で、特徴的な男女差を示したものではなかった。
- ⑦ 敬語 敬語を挙げたのは 30 名(6.9%)で、敬語を使って丁寧な表現をするの

は女性であるという意見が圧倒的であった。(23名)これは従来説の通りである。その他の例は以下の通りである。

女性について ・「お」を使って丁寧に話す。

男性について ・「～しろや」など語尾が命令口調。

・命令口調が女性より多い。

- ⑧ パラ言語 パラ言語に類するものは 31 名(7.1%)が挙げている。最も多かったのは「女性は声が高い。男性は低い」(10例)でその他は表5の通りである。

表5 女性らしさ・男性らしさが現れるパラ言語

女性らしさ (19例)	早口、リズムカルな話し方、声が明るい、抑揚が大きい、ストレートできつい口調、語調が柔らかい、はっきりと話す、やすらぎをくれる話し方
男性らしさ (10例)	ちょっと怒ったように話す、はきはき、早めに話す、ゆっくり話す、無口に思われる話し方、かたい

従来女性は小さな声が特徴と言われているが、本調査ではそういった意見はなかった。また上記のように男女に類似の特徴(早口-早め/はきはき-はっきり)も挙げられていた。

- ⑨ その他 その他は 30 名(6.9%)で、discourse 的なもの(12例)、呼びかけ(9例)、返事(6例)、相づち(4例)などが挙げられていた。(52例)

相づちに関しては、4例とも女性に多いが男性にはないという意見であり、女性の「そうだよね。」「あー、わかるわかる。」「うんうん。」「そうそう。」などの多用を挙げている。呼びかけ、返事に関しては男女の言葉の違いを対比して「ねえーおい」、「うん、そうだね。ーおー、そうだな。」を示すものもあった。その他の意見については以下の通りである。

女性らしさ ・説明を詳しく加えながら会話をする。

・主題から離れない。

・間投詞の多用。

男性らしさ ・単語で話す。

・ポイントを押さえて話す。

・話題が本題から外れる。

・区切られた返事がなくそのまま言いたいことを言う。

以上、9分類の各記載数(複数回答)の総数は 950 例で、それを多い順に並べると、①終助詞 413 例(43.5%)、②呼称 223 例(23.5%)、⑤語彙 123 例(12.9%)、⑨その他 52 例(5.5%)、⑦敬語 43 例(4.5%)、⑧パラ言語 39 例(4.1%)、④イントネーション 32 例(3.4%)、③音変化 19 例(2%)、⑥文法 6 例(0.6%)となる。これらは従来からいわれてきている男女差について、現代の若者も基本的には同じ意

識を持っているということを示すものである。

3. 2. 4. 男女差が現れる場面

次に言葉の男女差について、それが現れる場面を意識する観点から記述した人が全体の25%(110名)いた。それを表6に示す。

表6 男女差が現れる場面

対人場面 (40例)	異性間(8)、目上/年上(8)、親しい人(7)、年下/同等(3)、親(3)、初対面(2)、あまり親しくない人(2)、恋人(2)、子供(2)、
機能場面 (27例)	同意を求める時(4)、きちんとした話し方をしたい時(2)、自分の性を誇張したい時(2)、命令する時、相手と呼ぶ時、テーマに沿った話し合いをする時
感情表現場面 (27例)	怒った時(12)、感情が高ぶった時(8)、驚いた時、奇声をあげる時
具体的場面 (16例)	けんかの場面(9)、普段(3)

4つの場面では対人場面が最も多いが、相反する場面が挙げられていたのが特徴的であった。「目上/年上」と「年下/同等」や、「親しい人」と「あまり親しくない人」、また具体的場面の「けんか」と「普段」などといったものである。これに関しては本稿4. 3. で考察する。

4. 人称代名詞を含む呼称について——意識調査と使用実態調査との比較——

3節で行った意識調査では、男女の話し言葉の差違は①の終助詞を含む文末表現に現れるとの指摘が最も多かった。これに関するものは小川(1997)を参照されたい。ここでは、次に多かった②人称代名詞を含む呼称について、意識調査の結果と使用実態の比較、1974-5年の国研調査結果との比較を行う。

4. 1. 意識調査の結果

意識調査の結果、人の呼び方に男女差が現れると93名が回答した。その詳細を表7に示す。

本調査では自分のことを呼ぶのに、女性の場合は48%あまりが「わたし」を、男性の場合は33%以上が「おれ」を、ほぼ24%が「ぼく」を使用するとの指摘があった。女性は「わたし」に次ぐのが「あたし」であるが8%足らずである。

相手を指している場合、女性は「あなた/あんた」の代名詞より「名字/名前・ニックネーム」をそのままあるいは「～さん/ちゃん/くん」の接尾辞をつけて使用すると認識されている。これに対し男性は「おまえ」を使用するとの指摘が21%あまりで、ついで少数ではあるが「きみ」(2.2%)が使われるとし、「名字/名前・ニックネーム」はあまり使わないとしている。

第三者を指している場合、男性は「そいつ/こいつ/あいつ」を使用するとの指

指摘が多く、「やつ」と合わせて男性らしい表現の使用が指摘された。女性は「あの/この人」「あのこ/そのこ」の使用とともに「名字/名前・ニックネーム」の使用も指摘された。女性の「あのこ/そのこ」などの「～こ」の使用は男性の「あいつ/そいつ」に対応するもので、女性らしい表現との認識があると思われる。

男女共使用可能なフォーマルな感じの「わたし/あなた/あの/この人」を中心に考えると、女性はより頻繁にこの中心に近い表現を使用するとの意識があり、女性らしさはフォーマリティーによって表されるという考え方が示されている。フォーマリティー

が低い場合、女性は男性がよく使う表現とは重ならない「あたし/あたひ/あのこ」などの女性らしい表現を使い、男性の場合、「おれ/ぼく」という女性が使う表現とは重ならない男性らしくだけた表現が中心と意識されている。

次に以上の意識調査の結果を使用実態例と比較し、重なり、ずれを考察する。

4. 2. 使用実態調査——大学生の呼称使用——

1996-8年の3年間に大学生241名に依頼し、現代の若者の男女の日常会話を3分間録音してもらった。調査の目的は現代の話し言葉に男女差はあるかどうか、話し言葉の特徴は何かを明かにすることであった。録音したテープを書き起こしたもののうち、データとして疑問がある20を除いた221名の記録を利用した。また若者の話し言葉の実態調査が目的であることから、発話者の年齢は弟、妹、下級生を含む13、4歳から、大学の先輩、アルバイト先の仲間を含む30歳前後までの部分をデータとして採取した。親あるいはそれ以上の年代の発話は数えなかった。その結果、女性発話者352名、男性発話者296名が登場し、その呼称使用の例数を数えた。一人の発話者が何回同じ呼称を使っても1例と数えた。また同じ発話者が例えば1人称呼称として2種類使用した場合は2例と数えた。％は女性使用総数、男性使用総数に占める割合である。

表7 呼称に関する意識調査

	女性使用との指摘 (総数88)			男性使用との指摘 (総数136)		
	呼び方	指摘数	%	呼び方	指摘数	%
1 人 称	わたし	42	47.7	おれ	45	33.1
	あたし	7	8.0	ぼく	32	23.5
	うち	2	2.3	自分	2	1.5
	あたひ	1	1.1	わい	2	1.5
	自分	1	1.1	わたし	1	0.7
	自分の名前・ニックネーム	1	1.1	わし	1	0.7
2 人 称				おい	1	0.7
	あなた	4	4.5	おまえ	29	21.3
	あんた	4	4.5	きみ	3	2.2
	名前・ニックネーム	6	6.8	きさま	1	0.7
	自分	1	1.1	あんた	1	0.7
	～ちゃん	2	2.3	てめえ	1	0.7
3 人 称	～くん	1	1.1	おい	1	0.7
	～さん	1	1.1	名前・ニックネーム	2	1.5
	あの/この人	6	6.8	そいつ/こいつ/あいつ	13	9.6
	あのこ/そのこ	3	3.4	やつ	1	0.7
	名前・ニックネーム	4	4.5			
	～ちゃん	1	1.1			
～さん	1	1.1				

まず使用例すべてを示したのが表8になる。

表8 呼称使用に関する実態調査

	女性による使用 (総数352)		男性による使用 (総数364)			
	呼び方	例数	%	呼び方	例数	%
1 人 称	わたし	108	30.7	おれ	142	39.0
	あたし	33	9.4	ぼく	14	3.8
	うち	18	5.1	うち	9	2.5
	自分	5	1.4	自分	6	1.6
	おれ	3	0.9	わたし	2	0.5
	ぼく	1	0.3	おれさま	1	0.3
	名前/ニックネーム	10	2.8	名前	9	3.8
2 人 称	あんた	14	4.0	おまえ	55	15.1
	おまえ	10	2.8	あんた	6	1.6
	あなた	2	0.6	きみ	2	0.5
	自分	6	1.7	おたく	2	0.5
	きみ	3	0.9	自分	2	0.5
	そっち	2	0.6	あなた	1	0.3
	名字	2	0.6	そっち	1	0.3
	(名字) くん	16	4.5	名字	7	1.9
	(名字) さん	5	1.4	(名字) くん	8	2.2
	名前/ニックネーム	9	2.8	(名字) さん	3	0.8
	(名&ニ) ちゃん/さん/くん	23	7.1	(名字) ちゃん	3	0.8
	(-) 先輩	4	1.2	名前/ニックネーム	13	3.6
				(名&ニ) ちゃん/さん/くん	4	1.1
				(-) 先輩	4	1.1
3 人 称	こいつ/あいつ	5	1.4	こいつ/あいつ	15	4.1
	(その/あの等) こ	7	2.0	(-) やつ	10	2.7
	(その/あの等) ひと	7	2.0	(その/あの等) こ	2	0.5
	彼/彼女	7	2.0	(その/あの等) ひと	3	0.8
	(-) やつ	2	0.6	彼/彼女	3	0.8
	名字	1	0.3	名字	5	1.4
	(名字) くん	13	3.7	(名字) くん	8	2.2
	(名字) さん	7	2.0	(名字) さん	6	1.6
	名前/ニックネーム	13	3.7	名前/ニックネーム	9	2.5
	(名&ニ) ちゃん/さん/くん	12	3.4	(名&ニ) ちゃん/さん/くん	5	1.4
(-) 先輩	4	1.2	(-) 先輩	4	1.1	

* 「名&ニック」は「名前/ニックネーム」の略

1人称については女性の場合、「わたし/あたし」の使用が著しく多く、これは意識調査の結果と一致する。ただし「わたし」の使用頻度は意識調査より低く、「あたし」の方は高くなっている。意識調査で示された頻度数と実態調査で使われた頻度数を比べると、わたし②あたし③うちという上位の順番は一致する。男性の場合、「おれ」の使用は39%で意識より多少多いが、「ぼく」の使用は4%弱で意識の24%とは大きくかけ離れている。4.1. で女性はフォーマルな感じの語を使用、男性はくだけた表現の使用が指摘されたが、「おれ」の方が「ぼ

く」よりやや乱暴な表現であり、4. 1. で示された傾向は実態調査でより顕著に出ている。

2人称については、女性の「名字/名前・ニックネーム」使用は代名詞使用より多く、意識調査の指摘と一致する。男女共使用可能な「あなた」の使用は少なく、「あんた」や「おまえ/きみ」の方が多く使われている。男性の場合「おまえ」の使用が約15%と際立って多いが、意識調査の約21%ほどではない。これに対し、女性がよく使うとされた「名字/名前・ニックネーム」の使用は男性が使う2人称の約10%にものぼり、この点では意識(1.5%)よりはるかに多い。「あんた」の使用も6例観察される。

3人称については、「こいつ/あいつ」の使用は意識調査同様、男性の使用が中心であるが意識では10%弱の指摘であった。現実には4%で、意識ほどには使用されていない。女性の使用もわずかながら観察される。3人称の使い方の男女差は際立ったものではないが、わずかながら男性使用が多いものが「こいつ/あいつ」「～やつ」、わずかながら女性使用が多いものが「～こ」「～ひと」「彼/彼女」と言える。「名字/名前・ニックネーム」の使用は女性の方が多いと言えるが、男性も代名詞に劣らずかなり多く使用している。男性は名字のみの使用が女性よりやや多く、「～くん/さん/ちゃん」「名字/名前・ニックネーム」は女性の使用がやや多い。

以上から、女性はフォーマルな感じの呼称、「あたし/あんた/あのこ」の女性のくだけた表現、「名字/名前・ニックネーム」の多用に女性らしさが見られ、男性はフォーマルな感じが薄い呼称の使用に、男性らしさが現れるという意識調査の結果が、本使用実態調査でも確認された。両調査間で最も大きなずれは「ぼく」の使用がわずかであることで、次いで男性の2人称における「名字/名前・ニックネーム」の多用であった。

さらに細かく実態調査を分析すると、女性はよりフォーマリティーの低い表現を使用する傾向が見られ、男性らしい表現の使用も出現、またややくだけた女性らしい「あたし/あんた」などの呼称も意識よりは多く使われている。フォーマルな感じを表す呼称の使用は意識ほどには多くない。女性らしさよりは、フォーマリティーの低い男性がよく使う表現に歩み寄る実態が示された。男性の場合は、「おれ/おまえ」などの男性らしい表現の使用は意識より多いが、女性がよく使う「名字/名前・ニックネーム」の使用も女性に劣らずよく使われている。この2つの特徴から、男性はより男性らしい表現を使用する傾向とともに、女性が多用する表現に近付きつつある実態が示されたと言えよう。3. 2. 1. の意識調査では33%の人が男女差はないとしているが、以上の呼称使用の傾向にその一面が示唆されている。

4. 3. 国研調査——呼称の使用——

国研調査では呼称に関して「自分のことを何と呼ぶか（1人称単数）」「相手を指しているとき何というか（2人称単数）」を調査、分析している⁹⁾。男女の呼称使用頻度の差について、国研調査は男性総数、女性総数に対する使用の比率のみの記述となっている。本稿の調査は現代の若者の言葉を対象としたものであるから、国研調査の中から 15-29 歳までの年齢層の回答を取り上げて論じることとする。（表 9）この年齢層における男女使用の差が調査、記述されていないのが残念である。

表 9 「自分・相手の呼び方」

	調査全体における使用比率 (15・69)	性別による使用比率		15歳～29歳使用比率		呼び方	調査全体における使用比率 (15・69)	性別による使用比率		15歳～29歳使用比率	
		女	男					女	男		
1 人 称 単 数	呼び方				2 人 称 単 数	あなた	54.2	70.1	37.6	53.2	
	わたくし	30.4	38.6	21.7		25.1	あんな	21.8	25.6	17.9	14.7
	わたし	63.4	74.8	51.4		56.1	きみ	22.8	1.2	45.1	24.6
	わし	6.0	0	12.2		0	おまえ	19.8	1.2	39.0	27.0
	あたし	14.6	25.6	3.3		17.1	おたく	21.7	23.8	19.5	14.4
	うち	5.7	10.6	0.6		6.4	じぶん	4.9	3.5	6.3	8.6
	おれ	30.7	1.0	61.2		52.9	その他名前等	20.8	18.9	22.8	20.9
	ぼく	32.8	0	66.6		45.7					
	じぶん	13.2	6.3	20.3		11.8					
	その他名前等	3.9	4.5	3.3		1.9					

(1974年国語調査「大都市の国語生活」 国立国語研究所)

1人称の場合、15-29歳の使用比率は男女合計で多い順に

国研調査：①わたし (56.1%) ②おれ (52.9%) ③ぼく (45.7%)

④わたくし (25.1%) ⑤あたし (17.1%) ⑥じぶん (11.8%)

⑦うち (6.4%) ⑧その他名前等 (1.9%)

実態調査：①おれ (40.2%) ②わたし (30.5%) ③あたし (9.1%) ④うち (7.5%)

⑤その他名前等 (5.3%) ⑥ぼく (4.2%) ⑦じぶん (3.0%)

「わたし」の使用は減少、「おれ」の使用が一位となっている。「わたくし」の使用はゼロであった。この24年間に「わたくし」「ぼく」の使用は激減し、「あたし」「名前等」の使用割合が増加していることがわかる。全体としては1人称単数使用そのものが減少している。男女の使用比率は国研調査の対象年齢が 15-

69歳までで単純には比較できないので、上位4つの順位のみで比較する。

女性は、

国研調査：①わたし ②わたくし ③あたし ④うち

実態調査：①わたし ②あたし ③うち ④名前等

「わたくし」の使用はゼロ、「名前等」の使用が上位にきていることの2点が特徴的である。男性は、

国研調査：①ぼく ②おれ ③わたし ④わたくし

実態調査：①おれ ②ぼく ③うち/名前等

この24年間の変化としては若い男性の「わたくし」の使用はゼロに、また「ぼく」「わたし」の使用は激減している。代って「おれ」の使用は顕著に増加した。

2人称についても同様に考察する。

国研調査：①あなた (53.2%) ②おまえ (27.0%) ③きみ (24.6%)

④名前等 (20.9%) ⑤あんた (14.7%) ⑥おたく (14.4%)

⑦じぶん (8.6%)

実態調査：①名前等 (43.8%) ②おまえ (32.0%) ③あんた (9.9%)

④じぶん (3.9%) ⑤きみ (2.5%) ⑥あなた (1.5%) ⑦おたく (1.0%)

この24年間に「あなた」の使用はほぼゼロに近いほどまで激減、「きみ」「おたく」も減少、代って「名前等」の使用が著しく増加、「おまえ」「あんた」「じぶん」も増加した。男女の使用比率を単純に比較すると、

国研調査：女性…①あなた ②あんた ③おたく ④名前等

男性…①きみ ②おまえ ③あなた ④名前等

実態調査：女性…①名前等 ②あんた ③おまえ ④じぶん

男性…①おまえ ②名前等 ③あんた ④きみ/おたく/じぶん

この24年間の変化を見ると、女性は「あなた」の使用は激減、「おたく」の減少、「名前等」の使用の著しい増加、「おまえ」の出現が特徴的である。男性については女性同様「あなた」の使用はほぼゼロに近いほどまでの激減、「きみ」の著しい減少、「名前等」「おまえ」の増加が特徴的である。

以上、呼称の使用について24年前と比較した。特徴をまとめると、現代の若者は女性の「わたくし」「あなた」をほとんど使用しなくなり、また男性の「ぼく」の使用も減少した。代って1、2人称とも「名前等」の使用の増加が顕著となっている。4.2.では意識に比べて女性は女性らしさより男性の使用が多い表現に歩み寄る傾向が、男性はより男性らしい表現とともに女性が使用する表現に歩み寄る傾向が実態として示された。同様の傾向は国研調査との比較においても明かである。24年前に確認された意識は、現代にも引き続き意識として残っているが、実態とはかけ離れたものとなっていると言えよう。

4. 4. 場面との関係

呼称には各人称それぞれにさまざまな人称代名詞、語法がある。話し手がどれを選択するかは話す相手、話題となる第3者、即ち人間関係によるところが大きい。またどんな場面、何を目的とした会話か、話し手の感情なども呼称選択に関わる要素である。呼称の使用と選択に男女の差違が現れることが、本意識調査で多く指摘され、使用実態調査でもこのことが裏付けられた。どんな場面に男女差が現れるかは、呼称選択の人間関係的、場面的、状況的要素によるものである。その場面は意識調査結果の3. 2. 4. で示された4つの場面に対応するものであった。

これは敬語使用を含む待遇表現の配慮すべき要素と重なっている。

安田(1992, p.266)は待遇表現の記述の中で、数多くある表現の中から発話者はさまざまな要素を考慮して1つを選択し使用すると述べ、その要素として以下を挙げている。

- a) 人間関係への配慮 <上下関係> (地位、立場、年齢、恩恵の有無等)
<親疎意識> (うち・そとの関係、隔たり)
- b) 場面的配慮 改まり、相手の人数、媒体、相手との実際の距離
- c) 内容への配慮

即ち男女差の使い分けは待遇表現の一環として捉えることができるのである。意識調査の結果を見ると、対人場面において、「目上/年上」に対して現れるという指摘と「年下/同等」に現れると相反する指摘がなされている。また「初対面の人」と「親しい人」、「異性間」と「同性間」と、ここでも対立が見られる。しかし、各対人関係において、どう差が現れるのかの指摘はなされていない。例えば、異性間の場合、女性はより女性らしく振る舞うために女性らしい言葉を使うのか、あるいは逆に異性を意識していないようにわざわざ男性らしい言葉を選択するのか、その選択は発話者の心理に依存するものである。改まった場面で目上の人に対する場合、概ね男女共通のフォーマリティーの高い表現が使用される。またくだけた場面で男女差が現れるという指摘は、より自分の性にふさわしく振る舞うか、あるいは相手の性に合わせて一体感の中からより親しみを共感するのか、2つの場合が考えられる。それはやはり発話者のその場での心理が働く。呼称に関してはくだけた場面で、女性はより男性に近い表現で、男性はより男性らしくとともに女性の表現に近づく傾向が見られた。

5. まとめ

日本語教育において、男女差をどう扱ったらよいか考えてみる。先に指摘したようにこれは待遇表現の一環であり、発話者の心理が深く関わる問題である。

そこで指導方法に取り入れる場合、

- 1) より女性らしい表現、より男性らしい表現のグループをそれぞれ学習者に提示する。
- 2) 意識調査結果の4つの分類場面で、自分の性を前面に出すか/出さないかについて日本人の場合一定した意識を持っているわけではなく、その場での心理によって使い分けていることを学習者に示す。

そしてよりよい対人関係のためのソーシャル・スキルとして、学習者が自身自身で人間関係的、場面的、状況的要素を考慮しつつ必要に応じて1)で示した2つのグループのどちらかを選択し、使い分けていく運用能力を指導することが必要である。これはインフォーマルな会話指導に不可欠であると言えよう。

(朝日カルチャーセンター・聖心女子大学・聖心女子大学)

【注】

- 1)呼称とは人称代名詞を含む自称詞、対称詞、他称詞を合わせた総称とする。
- 2)本文中に掲げた杉本の「縦関係の枠組みの中」という指摘以外に、井出は、女子学生がくだけた場面であってもわずかながら敬語を使っていることを観察している(井出: 1983, pp.176-7)。
- 3)国立国語研究所(1981a,b)では東京と大阪で1974-5年に1000名規模(東京639名、大阪359名、年齢層15-69歳)の言語調査を行い、その中に「現代の男女のことばの差」の意識について数項目がある。NHKも1979年に3600名規模の同様の調査をしている。(NHKことば調査グループ,1980)いずれもその調査時点から20年あまり過ぎていることなどから、新たな調査の有用性を考えた。本稿では、この言語調査の結果を合わせて考察するものである。
- 4)国研調査は東京、大阪を対象に行われたが、本稿の調査対象の大学生の出身地は東京、大阪に限らず日本全国に渡っていることから、比較の都合上国研調査の全対象者合計998名のデータを参照することとする。

【参考文献】

- 堀井令以知,1990,『女の言葉』,明治書院。
- 井出祥子,1983,「女性の話しことば」,『話しことばの表現』(水谷修編),筑摩書房: pp.174-193。
- 寿岳章子,1979,『日本語と女』,岩波書店。
- 見坊豪紀他編,1981,『新明解国語辞典 第三版』,三省堂。
- 見坊豪紀他編,1997,『新明解国語辞典 第五版』,三省堂。
- 国立国語研究所,1951,『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』,秀英出版。

——, 1981a, 『大都市の言語生活—分析編—』, 三省堂.

——, 1981b, 『大都市の言語生活—資料編—』, 三省堂.

Makino Seiichi & Tsutsui Michio, 1986, *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*,
The Japan Times.

益岡隆志・田窪行則, 1992, 『基礎日本語文法—改訂版—』, くろしお出版.

水谷信子, 1989, 「待遇表現指導の方法」, 『日本語教育』, 69号: pp.24-35

NHKことば調査グループ編, 1980, 『日本人と話しことば』, 日本放送出版協会.

小川早百合, 1997, 「現代の若者会話における文末表現の男女差」, 『日本語教育論文集
—小出詞子先生退職記念—』, 凡人社 : pp.205-220.

斎藤あづさ, 1995, 「女性語の意識変化」, 『日本語教育論文集』, 福岡YMCA: pp.49-68.

新村出編, 1995, 『広辞苑 第四版 CD-ROM カラー版』, 岩波書店.

杉本つとむ, 1975, 『女のことば誌』, 雄山閣出版.

———, 1994, 『近代日本語—歴史的所産としての言語—』, 紀伊国屋書店.

田中章夫, 1973, 「終助詞と間接助詞」, 『品詞別日本文法講座9 助詞』(鈴木一彦・林巨樹編), 明治書院:
pp.209-247.

上野田鶴子, 1972, 「終助詞とその周辺」, 『日本語教育』, 17号: pp.62-77.

山本富美子, 1989, 「待遇表現としての文体」, 『日本語教育』, 69号: pp.77-92.

安田芳子, 1992, 「待遇表現」, 『入門日本語教授法』(東京YMCA日本語学校編), 創拓社:
pp.265-277.

横田雅弘, 1991, 「留学生と日本人の親密化に関する研究」, 『異文化間教育』, 5 : pp.81-97.

【資料】

日本語の話し言葉についてのアンケート (1998)

○まず、ご自身のことについて、お教え下さい。

1. 年齢
2. 性別
3. 日常、主に話している言葉はどこの地方の言葉ですか。
4. 3.の言葉を何年くらい使っていますか。

○次に、日本語の話し言葉についてお教え下さい。この場合の「話し言葉」は、家族以外の
親しい人との会話を思い浮かべて下さい。

- a. 日本語の話し言葉には男女の違いがあると思いますか。
- b. 日本語の話し言葉に男女の違いがあるとすると、どういう場合・表現・言葉遣いなど
にあらわれていると思いますか。
- c. あなたご自身は、自分の性別らしい言葉遣い(例: 女らしい言葉遣い、男っぽい言
言葉遣い)をしていると思いますか。